



# Noise

晴れた日の朝。  
私は窓を開け、空を見上げ、旅に出ようと考えた。  
手にしたものは、小さな時刻表と、コートポケットにはテープレコーダー。  
まだ寝静まっている家の玄関のドアを静かに開けると、カチャリ音がした。  
テープレコーダーはもう回り始めている。  
家を出て、坂道を駆け下り駅に着く。はずんだ息遣いが録音された。  
ベンチに腰掛け、時刻表を手にした。  
町の駅から中央線に乗り、雪の被る山々をいくつか通りすぎると、  
昔来た事のある小さな城下町に列車は止まった。  
町はもう小さくなかった。  
前にはホームから町を見下ろせるほどだった駅の、大きな階段とエスカレーターを昇り降りして外へ出た。  
テープレコーダーには駅の中に響く列車の音や、アナウンスの音が入った。  
駅を出ると、昔、青いリンゴをネットに入れてぶら下げて売っていたお土産やさんの家が大きな駅前ビルに変わっていたが、通りの向うに霞んで見える冠雪した山々はちっとも変わってはいない。  
高原の青い空にそびえる黒いお城の天守閣を昇り、次に古びた洋館へと向かう。町を巡回するバスの音。ひそひそと話し声が聞こえる珈琲店。一日中あちこち歩き回って、疲れ果てて棒になった足を引きずり、時刻表片手に駅へと向かう。もうそこが駅、とどこかでバタッと転んだ。居合わせた買い物のおばさんが、気の毒そうに声をかけてくれた。「お大事に……」私は飛び散った荷物を拾い集め、ポケットにしたのぼせていたテープレコーダーが遙か先に飛ばされていたのを見た。バラバラになっていた。もう列車の音も、弾ませた息遣いも、珈琲店のひそひそ声もみんな無くなった。



もういい。  
私は、旅の音を捨て、家路についた。  
**旅は猫で、想像力はねずみです。どんなにす早くともこの猫にはねずみを追いつくことなんかできないのです。ですって！ そうなの??**

寺山修二

# COLUMN

## 鎌倉の猫事情 第四十一話



来る鳥はといえば、一番最初に春を知らせてくれるのは、ういすです。山の方ではもう鳴きはじめています。鎌倉は、海にも山にも恵まれていますから、たくさんの鳥たちがいます。あの姿あの声には、私達は季節を感じ、心慰められるのですが、猫達はまた違うものを感じるようです。春になると鳥だけではなく、命あるすべてのものが活動を始めます。ゲーニー一家の住みかであるヨレクホールの二階にも春になると様々な小動物が持ち込まれます。この頃、弱ったやもりが始終家の中にいるのを見かけるので、どう変だと思っ

て見ていると、うちの猫たちが皆でやもりを飼っているようなのです。運の悪い哀いそづなやもりです。そと尻尾をつかんで表に逃がしてやりました。宿敵、子ねずみも当然標的となっています。時々自慢げにわえて帰って来るのには、思わず絶叫してしまいますが、これはまあ、猫の唯一の仕事ですからしょうがないでしょう。ゲーニーとスイ、ピーが子猫の頃から、スイ、ピーの方が狩猟の名人(猫)なのですが、やはり春先のこと、一番小さな長女のすみれが、裏路地でもぐり口のような美しい目の緑色の小鳥を捕まえ、ぐったりとしたその小さな体を見つめていたのです。そして、もう一度しっかりくわえ直し、ひらりと消え去りました。あの鳥…保護鳥じゃないかしら? ごめんなさい……



to be continued

鈴木さんちの梅が咲きました。これは事件です。今日はまだ2月29日。鈴木さんの家の梅は、なぜかこのあたりでは一番遅くて、毎年3月ににならないと咲かないのです。いつも丁寧に枝払いしているせいなのかどうか、とにかく鈴木さんの梅が咲いたら、もうこのあたりの梅は皆終わりなのです。いくらなんでも早いんじゃないでしょうか? そうしているうちに桃が咲いて、桃が終わらないうちに、桜が咲いてるうちに、山桜、ツツジ、山吹、どんどん咲いて、あっという間に皆終わってしまいます。確か一昨年在りそんな調子でした。新入社員が入ってくる前に、花見の宴会が終わってるんじゃない、なんとなく間が悪いじゃないですか。渡り鳥たちも旅支度が大変です。こちらへ来る鳥達もいれば、そうそうに海を渡って帰って行く鳥もいます。案外渡るのを忘れてそのまま居続ける鳥もいるそうです。それで暮らせるものなら、何も急いで帰らなくてもゆっくりしていけばいいんですけど、帰れば帰っているいるあるんでしょね。鎌倉の海岸で海を眺めていると、鳥達が連帯して飛行する訓練をしているのが見られます。始めは数羽だった群がだんだんと飛行に参加する鳥が増えて、その群が一羽の鳥を先頭に、海の上を右へ左へと三角形を描いて何日か飛び回っていますが、その内、規則正しい大きな三角を作ると、やがて飛び立っていきます。